

Bさんはなぜ妬まれたのかー学生 NGO JAPSAM の活動からー

同志社大学 文学部 社会学科 社会学専攻

12032066

杉浦 史教

担当教官 立木 茂雄

目次

第1章 序論

1節 JAPSAM とは

2節 問題意識

第2章 問題の背景

第1節 先行研究

第1項 ブローカー

- (1) ブローカー
- (2) <ブローカー>は何を行うのか
- (3) どのような人物が<ブローカー>となるのか
- (4) <ブローカー>はどのようにして利益を得るか
- (5) <ブローカー>はその経歴をいかにして積み重ねていくのか

第2項 コアリッション

- (1) コアリッション
- (2) 行為セット
- (3) ファクション

第3項 バランス理論

第2節 フィールドの概要

第1項 バランガイ・ソルソゴン

第2項 SAVE

第3章 方法

第1節 分析の対象

第2節 調査の方法

第4章 結果と考察—Bさんはどうして妬まれることになったのか—

第1節 パトロンとしての JAPSAM

第1項 パトロンとしての JAPSAM

第2項 高まる JAPSAM への期待

第2節 <ブローカー>としての Bさん

第1項 SAVE の内紛の中心人物のネットワーク

第2項 <ブローカー>としての Bさん

第3節 行為セットからファクションへ

第1項 行為セットからファクションへ

第2項 何に対する妬みか

第5章 関係改善に向けて—結論に変えて—

第1節 反省

第2節 関係改善に向けて

おわりに

注

参考文献・参考資料

第1章 序論

第1節 JAPSAM とは

Japanese-Philippino Sustainable Social Action Movement (以下、JAPSAM) は、フィリピンのサマル島という島に継続して関わり続けている学生 NGO である。JAPSAM の活動は 2002 年 3 月から始まり、これまでに子どもたちのための運動場作り、職業訓練所の建設や水道管の取り替え工事などを行ってきた。

JAPSAM はサマル島のバランガイ・ソルソゴンというところで活動を続けており、現地の NGO である SAVE やバランガイ・ソルソゴンの人たちと協力して活動を続けている。構成メンバーは関西にある大学へ通う学生が中心である。

JAPSAM は「サマルとともに～Walking with Samar～」を理念とし、JAPSAM から一方的な支援とならないよう、JAPSAM と現地の人の相互が納得できるプロセスを踏むことを重視している。

3 月と 9 月の大学の長期休暇を利用し、ワークキャンプを行っており、1 回のワークキャンプで 2～3 週間、現地に滞在している。

現在は「チャイルド・エンパワーメント」を活動の軸としていて、子どもたちとともに、衛生教育に関する劇を行ったり、村の清掃活動などを行ったりしている。

日本においては 1～2 週間に 1 回ほど京都にある「ウイングス京都」という施設でミーティングを開き、活動についての話し合いを行っている。またそれ以外にも、フィリピンに関する映画の上映会、勉強会、活動の写真展、在日のフィリピン人の人びととの関わりなどを通して、自分たちの活動をアピールしたり、フィリピンに関する知識を深めるということを行っている。

第2節 問題意識

JAPSAM はこれまで約 5 年に渡り、バランガイ・ソルソゴンに継続的に関わり続けてきた。後述するが、その間、JAPSAM はバランガイ・ソルソゴンに多くの資源を提供してきた。その資源は、JAPSAM との提携関係にある現地の NGO、Solsogon Action for Visible End (以下、SAVE) の渉外である B さんを通じて要求されたものであった。B さんという人物は JAPSAM の活動のために奔走してくれる人物である。B さん抜きに JAPSAM の活動は成立しないといっても過言ではない。JAPSAM はこれまで多くの場面で B さんに頼りながら、その活動を行ってきた。

しかし、この 1、2 年の間にその状況は大きく変化した。SAVE の中で B さんをめぐる内紛が起こったのだ。それは、SAVE からの「B さんはずし」という形をとり、2006 年 8 月、B さんはついに SAVE のメンバーを辞めてしまった。これにより、JAPSAM はバランガイ・ソルソゴンで活動する際になくしてはならない B さんというパイプ役を失うこととなってし

まった。

それまで、団体としてまとまりのあった SAVE の人間関係が崩れてしまった。その内紛の原因は B さんに対する一部の SAVE のメンバーからの個人的な妬みであると考えられる。では、その妬みはいったいどこからやってきたものであるのだろうか。

本論文では、B さんに対する SAVE のメンバーからの妬みの原因について、Jeremy Boissevain (1974) の『友達の友達』で議論されている〈ブローカー〉という概念を用いて、B さんが balan-gai・sol-sogon や SAVE の人間関係のネットワークの中で演じていた役割を検証し、B さんに対する妬みの原因を探っていききたい。そして、そこから JAPSAM のこれまでを活動を振り返り、反省し、今後の活動への提言をバランス理論をもとに行っていきたい。

第2章 研究の背景

第2章では、本論文を書く上で必要な研究の背景を展開する。順番としては先行研究のレビューを行ったあと、フィールドの概要を説明する。

先行研究

先行研究として Jeremy Boissevain (1974) の〈ブローカー〉、コアリッションの概念と Heider の理論を用いて Thomas J. Fararo (1973) が展開したバランス理論の紹介をする。

第1項 ブローカー

(1) ブローカー

Boissevain (1974) はネットワークの操作の専門家に焦点を置き考察を行っている。それは〈社会的ブローカー〉に関する考察である。

Boissevain (1974) によれば、人間は誰もが社会的ネットワークの交点であるという。しかし、自己の利益のために、戦略的に重要な人物との関係を開発し、それらを操作することに誰もが関心を持っているわけではない。しかも、ネットワークを操作する企てを有利に進めるためには、これまで用いられたことのないような技術や資源が必要になる。つまり革新が必要となる。しかし、革新の結果はたいてい不確実なものだ。Boissevain (1974) はそのような不確実性の中で危険を恐れず、事業を進めようとする人物を事業家と呼ぶ。

Boissevain (1974) は、この事業家が操作する資源を2つのタイプに分けている。第1のタイプの資源は、土地や雇用機会など個人が直接的に統制している資源であり、第2のタイプの資源は、第1のタイプの資源を統制している人物や、その人物とつながりのある人物との接触の機会である。Boissevain (1974) は、第1のタイプを第一次資源、第2の

タイプを第二次資源と呼んでいる。そして第一次資源を分配するものをパトロン、第二次資源を分配するものを〈ブローカー〉と呼んでいる。〈ブローカー〉はどのような事業家であるかという、第二次資源を統制し、それを自己の利益のために操作するものことである。いわば「ブローカーはネットワーク操作に熟達した専門家」(Boissevain 1974: 192)なのである。

以下の問いに答えることにより、Boissevain (1974) は〈ブローカー〉の役割の遂行の仕方を考察する。その問いとはすなわち、1、〈ブローカー〉は何を行うのか、2、どのような人物が〈ブローカー〉となるのか、3、〈ブローカー〉はいかにして利益を生み出すのか、4、〈ブローカー〉はその経歴をいかにして積み重ねていくのか、という4つの問いのことである。

(2) 〈ブローカー〉は何を行うのか

Boissevain (1974) は「社会的ブローカーは、利益のために人びとを直接的にかあるいは間接的に互いを結び付けている」と述べている。〈ブローカー〉は個人間、集団間、社会構造間、文化間のコミュニケーションのギャップを架橋する存在なのである。コミュニケーションの架け橋である〈ブローカー〉のもっとも単純な実例はメッセージを伝達する電信通信係である。

(3) どのような人物が〈ブローカー〉となるのか

誰が〈ブローカー〉になるのか。この問いに Boissevain (1974) は2つの基準を設けている。1つ目はその人物の社会的ネットワークの構造と内容で、2つ目が社会的ネットワークを私的な利益のためにどの程度自分から進んで利用するかということである。そして、Boissevain (1974) は、この基準のほかに〈ブローカー〉としての成功のために必要なものとして1、ネットワークの中心度、2、社会関係の操作に費やせる時間、3、第一次資源を支配できる権力をあげ、この3つの事柄について考察を行っている。

1 中心度

社会的ネットワークの中心度とは「ある個人が、自己中心的ではないネットワーク内の人々と、どの程度接近可能であるかについての指標」(Boissevain 1974: 67)である。ある集団で個人の占める客観的な位置は、人や情報を操作しうる可能性に影響を及ぼしている。そのため、ある個人の位置がその集団で中心的であればあるほど、その個人が情報伝達できる可能性は高くなるのである。

そして、ネットワークの中心度について Boissevain (1974) は人びとは2つの文化や組織の双方に位置を占め、それゆえ両者の間に立って、両者を架橋することがあるとした上で、「この中心的な位置が、メッセージの伝達と送信に利用されるのである」(Boissevain 1974: 201)と述べている。〈ブローカー〉にとって社会的ネットワークにおいて中心的な

位置を占めるということは非常に重要なことなのである。

2 時間

社会関係の操作について、当然そのことに当てられる時間が多いものの方が、そうでないものよりも有利である。時間があることは、「〈ブローカー〉にとって貴重な財産である (Boissevain 1974: 203)」。

3 権力

Boissevain (1974) は、「権力は、第一次資源に対する統制力という意味で、ブローカーの活動能力を高めるもう1つの属性である (Boissevain 1974: 204)」と述べている。つまり、権力があれば相手の意思に関係なく、その行動に影響を及ぼすことができる。このことはメッセージを伝達したりする場合に、明らかに有利に働くのである。権力があれば、〈ブローカー〉は発することのできる信号の力を大きなものにすることができる。

(4) 〈ブローカー〉はどのようにして利益を得るか

3 つ目の問いに進む前に、Boissevain がメッセージをどのように捉えているかということについて触れておきたい。Boissevain (1974) はネットワーク間で流れるメッセージを取引きと捉えている。ここでいう取引きとは、「相互作用から得られる価値が費用 (価値の損失) と等しいか、あるいはそれより大きくなければならないという原則にのっとった、2人の行為者間の相互作用のことである (Boissevain 1974: 49)」。もし取引きに互酬性がある場合はその取引きは交換ということができる。

以上のようにメッセージに対する Boissevain の考えを示した上で、〈ブローカー〉が利益をどのように得るかということについて考えてみたい。

Boissevain (1974) は、〈ブローカー〉の資本は他者との関係の個人ネットワーク、つまりその人物のコミュニケーション回路であると述べている。そしてそれらは役割関係なのであるとも述べている。この役割関係は、すべて先に述べた互酬性あるいは取引きという考え方によって支配されている。したがって、「相互作用とは、当事者双方が価値物を獲得しようとしたり、あるいは少なくとも損失なしに事を運ぼうとする一種の戦略ゲームだとみなす必要がある (Boissevain 1974: 205)」。この価値物のことを Boissevain (1974) は手数料と呼んでいる。〈ブローカー〉が利益を上げられるかどうかは、取引き相手から取り立てられる手数料によって左右される。そして、この手数料はたいていの場合、後払いということになっている。

ここで注目すべきは取引きに時間差があるということである。〈ブローカー〉は期待、すなわち将来ありうるサービスを扱っているのである。つまり、〈ブローカー〉は信用を操作している。さらに、手数料は明確に指定されることはほとんどない。ほとんどの場合、支払いは後日何らかの交換が行われるという了解のもと、据え置きにされる。この場合、支払いがなかったとしても、関係の回路を開放したままにしておく。それは、相互依存の

関係を維持しておくほうが双方にとって有利だからである。

〈ブローカー〉の資本が第二次資源であるということは前述したが、その資本は、すなわち誰とどのくらい接触があるかということは、誰もはっきりと知っているわけではない。そのため、パトロンよりも〈ブローカー〉の方が信用を高めることはずっと容易である。「〈ブローカー〉の資源であるネットワークには制限がなく、したがって無限のもの (Boissevain 1974: 208)」なのである。

このように〈ブローカー〉はコミュニケーション・サービスを提供し、人々に負債を負わせることにより自らの信用を高める。〈ブローカー〉の信用がいったん確立されると、人々は〈ブローカー〉にサービスを提供し、〈ブローカー〉と信用関係を取り結ぶようになる。このような〈ブローカー〉によるサービス提供は、「将来への投資である (Boissevain 1974: 209)」。

Boissevain (1974) によると、〈ブローカー〉が自らの活動から引き出す利益の源泉には2つのものが考えられるという。1つが利権であり、もう1つが〈ブローカー〉が自らの資本と信用を別の形の資源に転換する能力である。さらに Boissevain (1974) は、〈ブローカー〉が取引きに投下したコストは、これらの利益の源泉によって相殺される必要があると述べている。

利権とは〈ブローカー〉の取引相手からの手数料だとみなされるサービスを何がいつ提供されるか決定できる可能性であると Boissevain (1974) は考えている。

Boissevain (1974) は、〈ブローカー〉がその資本である第二次資源を資産や政治的役職、条件のよい勤め先などの第一次資源に転換することは頻繁に行われていると述べている。それにより、結果的に〈ブローカー〉の勢力基盤は拡大することになる。しかしながら「この転換は慎重を要する (Boissevain 1974: 210)」。この転換により〈ブローカー〉はパトロンにもなるからである。Boissevain (1974) のようにパトロンの資本は無限ではない。第一次資源を分配できなければ、〈ブローカー〉は取引の元手である将来性をもはや扱うことができなくなるため、その信用が急激に低下してしまうことになるのである。〈ブローカー〉にとっては「自己の資産を経済的資源に徐々に転換することこそが、たとえ急激に莫大な利益は得られないとしても、安全なやり方なのである (Boissevain 1974: 211)」。

(5) 〈ブローカー〉はその経歴をいかにして積み重ねていくのか

Boissevain (1974) は、〈ブローカー〉が最初に直面する問題は、どのようにして人びとに自分を利用させるようにするかということであると述べている。そのため、〈ブローカー〉は自分のサービス需要を開発し、そのメッセージの伝達を保障できる別の〈ブローカー〉やパトロンやクライアントに接触する必要がある。

経験の浅い〈ブローカー〉に、その資本の多さを期待することはできない。そのため、1

人のパトロンが彼の最も重要な資本となる。しかし、その場合、彼の影響の及ぶ範囲はそのパトロンの統制化にある資源だけに限定される。一方、〈ブローカー〉の資本が別の有力な〈ブローカー〉からなっている場合は、彼の伝達できるメッセージはより多様なものとなり、クライアントをより多く作り出すことができる。

Boissevain (1974) によれば、〈ブローカー〉は利益を生み出すことによって信用を確立しなければならないという。〈ブローカー〉は単に要求を右から左へと伝達するだけで、理論的にその失敗の責任はその〈ブローカー〉に帰せられることはない。しかし、〈ブローカー〉が同じコミュニケーション回路を用いて伝達されなくてはならない多くの要求を引き受けており、その要求が相手側に優先的に受信されるかどうかは〈ブローカー〉の力量によって決まるということを知っている。最終的に、〈ブローカー〉の信用を拡大する能力は、クライアントにとって有利な回答を引き出すことに成功するか否かにかかってくる。

第2項 コアリッション

(1) コアリッション

コアリッションとは、「人々が自らの目標を達成するために進んで形成する、一時的な同盟のことである (Boissevain 1974: 221)」。コアリッションは、相互に依存しあっている諸個人から成り立っている。また、コアリッションは存在それ自体がそれを構成している諸個人の持つ目標と資源に左右されるばかりでなく、個人間の関係にも左右されるため、一定不変ではない。時がたてば、目標は変更され、人々の関係は変化する。また、コアリッションはその性質上、移り変わる状況の中で新しい資源を開発するための手段に適応することができる。そのため、コアリッションは、変化を前提としている。

(2) 行為セット

行為セットとは、「特定の目標を達成するために行為を調整しあった人びとのセットをいう (Boissevain 1974: 240)」。行為セットは単に、特定の目標を達成するために単一のリーダーもしくはクリーク¹⁾、すなわち成員が愛情と共同関心にもとづいて互いに定期的に交際し、かつ明確な一体感を有しているコアリッションが成員を目標に沿って動員することだけを意味しているのではない。Boissevain (1974) は、あらゆる行為セットにはリーダーシップと呼びうる中心人物やクリークが存在しているように思われるが、リーダーシップが行為セットを作る要素にはなりえないと述べている。リーダーシップはあくまで調整役なのである。また、Boissevain (1974) は、どの行為セットでも、ある程度の内部的専門分化がみられ、一定の人びとが特定の課題を割り当てられたり引き受けたりしているとも述べている。

行為セットの加入には「すべての成員の間に社会関係が保たれていることは、「必ずしも必要条件ではない」(Boissevain 1974: 245)」。しかし、多くの場合何人かの成員は、たいがいリーダーや中心的なクリークの他の成員とあらかじめ社会関係を持っている。

他にも Boissevain (1974) は、行為セット内で一緒に作業したからといって、その作業場面以外までも及ぶ行為規範が必ずしも生じるわけではないことも述べている。このことは、必ずしも行為セットに一体感が存在しているわけではないことを意味している。

(3) ファクション

ファクションとは、「名誉およびまたは資源の統制をめぐる、以前は結束していた1人もしくは複数の他者と争っている人物によって、あるいはある人物のために、構造的には多様な原理にしたがって個人的に徴募された人びと(フォロワー)のコアリッションのことである(Boissevain 1974: 246)」。ちなみに、ファクションの中心はそれを募った人物であり、その人物はリーダーと呼ぶことができる。リーダーがフォロワーを徴募する紐帯は多様であり、親族、近隣、経済的パートナーから同窓関係まで多岐にわたっている。

Boissevain (1974) によれば、ファクションは敵対的な競争にしのぎを削っている人間を支援するものなので対抗的な状態がそれが存在するための基盤である。その闘争は政治的で、イデオロギー的なものであるとも Boissevain (1974) はいう。

Boissevain (1974) は、ファクション内では、リーダーの周囲の部分とは比べて緊密に連携されているはずであると述べている。ファクションの中心部は彼らにより形成されている。さらに Boissevain (1974) は、この中心部とその他のフォロワーとの割合が重要な構造的変数であると述べている。強力な中心部が、すなわち複紐帯的で道徳的な要因に基づいている紐帯が、存在すれば、彼らが行動を共にする期間が長くなり、ファクションに永続性が生まれてくる。そして、ファクションが統合されている期間が長いほど、より多くの団体的特質を獲得できるようになるのである。また、リーダーが強力であれば、そのファクション内への指令をより正確に行うことができる。

リーダーにとって最も重要な資源の1つはフォロワーの人数と彼らに対する統率力である。リーダーは自分の限られた資源の消費を最小限にとどめて、できるだけ多数のフォロワーをひきつけておく必要がある。これはファクションの運営の問題である。そしてそのための方法は Boissevain (1974) によれば少なくとも2つの方法がある。1つ目はイデオロギーを導入することであり、2つ目は官僚制と呼びうるものを確立することである。イデオロギーについては、リーダーは集団的なシンボルと目的意識とフォロワーに対して与えることによって支配権の確立をできるようになるのである。官僚制の形態をファクションに導入するというのは、例えば支持者を持つフォロワーを引き寄せ、リーダーシップを独占的なものではなく、ほぼ対等なものうちの1人を第一人者とする、複数の人物からなるクリークのものとするという方法がある。また、ファクション内での仕事を専門分

化させ、リーダー自身は調整役となるというものもある。こうして、ファクションが安定的な状態となったとき、ファクションはリーダー中心ではなく、集団中心的な性質を持つようになる。

Boissevain (1974) は環境から引き出された新たな資源の利用可能性もまた、ファクションに影響を与えると述べている。この場合の資源とは、敵対者と戦ったりするための新しい技術と、リーダーたちが競い合う新たなフォロワーへの報償の 2 種類を Boissevain (1974) は念頭においている。Boissevain (1974) は、このような新たな資源の利用可能性はファクション内の派閥争いの激化につながるということも述べている。

第 3 項 バランス理論

バランス理論の基本的な考え方は、Heider (1958) のものである。これをもとに Fararo (1973) は『数理社会学Ⅱ』の中で以下のような論理の展開を行っている。

図 1

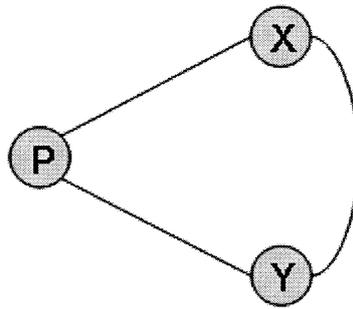
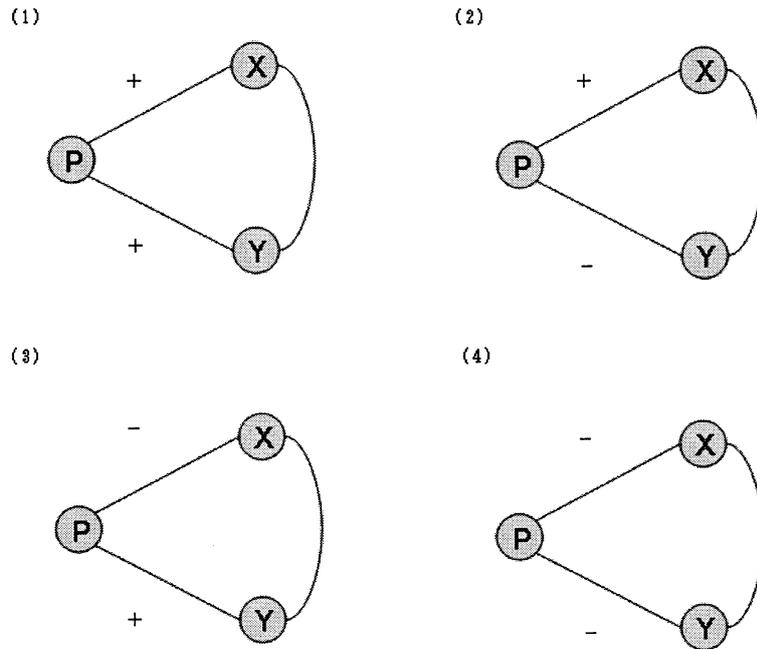


図 1 のような人間 P、X、Y がいたとする。まず、P という人を中心に考えて、P が X、Y に対してユニットを形成、すなわち P、X、Y の 3 者の関係を作るために P が X、Y に対して操作をするとき P から X、Y へと伸びる線は P の感情の結果として現れる。また、このとき X が Y に対しても感情をもつ。このような状況のとき Heider (1958) はこの 3 者の関係を以下のように定義する。

P が X、Y に対してユニットを形成するように、X、Y も P に対してユニットを形成する。このときの 3 者関係には以下の 4 つの関係がある。

図 2



この4つの関係のとき Fararo (1973) は、「XとYがユニットを形成する場合、Heiderの3者関係 (P, X, Y) はXとYが同符号のとき、しかもそのときに限りバランスしている (Fararo 1973: 57)」としている。図2でいうならば (1)、(4) はバランスしているが、(2)、(3) はそうではない。そして、以下の3つの Heider 理論の基本原則を紹介している。

原理 1 バランスしている状態は均衡状態である。

原理 2 もし3者関係がバランスしていないなら、バランスした状態へ向かう圧力が生じる。

原理 3 もし3者関係がバランスしておらず、しかも所与の条件化で変化が不可能ならば、緊張が生じる。(Fararo 1973: 57)

さらに、Fararo (1973) はグラフ2の (2)、(3) のような符号の不一致から生じるバランス問題が生じないように、バランスの定義を拡張して考える。このとき、形成されたユニットに対して+の符号をつけることを認めるならばこの Fararo (1973) の拡張されたバランスの定義は可能である。そのとき3者関係は図3に表される。

図 3

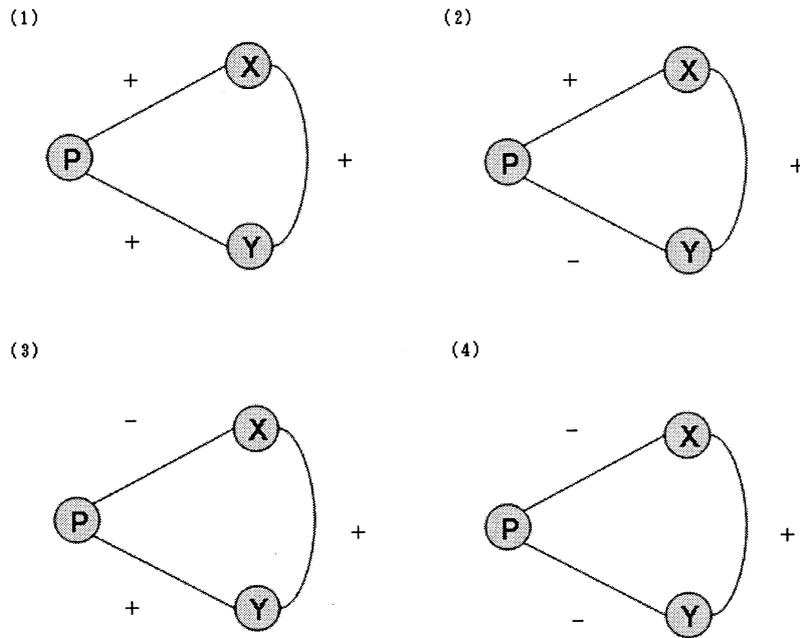


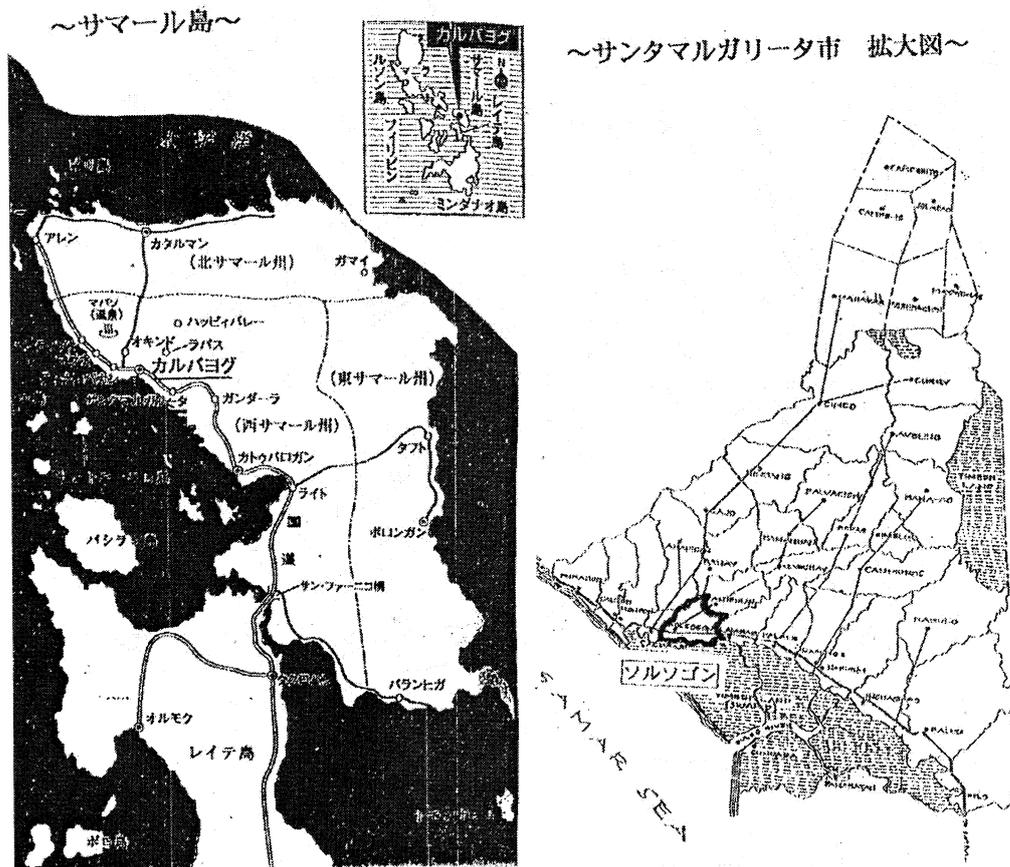
図 3 中の (1) から (4) までの各図は $P \rightarrow X \rightarrow Y \rightarrow P$ あるいは、 $P \rightarrow Y \rightarrow X \rightarrow P$ というサイクルを含んでいる。このとき、図 3 中でバランスしているグラフはサイクル中の符号の積が正のときに限る。図 3 では (1)、(4) がその条件を満たしている。これを Fararo (1973) は「各サイクルの積が正のとき、しかもそのときに限り、サイクルの条件が満足されたという (Fararo 1973: 58)」と定義する。そして、サイクル条件が満足されるときに Heider の 3 者関係はバランスしている。

第2節 フィールドの概要

第1項 バランガイ・ソルソゴン

バランガイとはフィリピンの行政単位で最小のものであり、日本でいう村に当たる。バランガイ・ソルソゴンはフィリピン・サマール島の州都カルバヨグ市の隣町、サンタマルガリータ町の中の村の 1 つである (地図参照)。

地図



第2項 SAVE

SAVE の略で、ソルソゴンで活動をしている NGO である。SAVE はマニラに住むソルソゴン出身者に B さんらが声をかけ 1992 年に結成された。この年に安全取引委員会というフィリピンの公的な機関に非営利団体として登録されたが、本格的な活動はメンバーの多くがサマル島に帰ってきた 1997 年から開始された。活動当初は 30 名だったメンバーも現在では 100 名を越す大きな団体となっている。彼らは、青少年教育、学校整備、そしてバランガイ全体の活性化などに力を注いできた。ただし、メンバーのほとんどはフルタイムの活動をしているわけではなく、SAVE のメンバーとして以外の手段で生計を立てている。そのため本格的に活動をしているのは一部の人間である。

SAVE の使命は「バランガイの活性化」である。JAPSAM はこの団体と提携し活動の企画、実行を行っている。現在の会長は M さんである。

第3章 方法

第1節 分析の対象

分析は、JAPSAM のメンバー、SAVE のメンバー、バランガイ・ソルソゴンの人びとを対象として行う。

第2節 調査の方法

調査には3つの方法を用いる。1つ目は参与観察。筆者はこれまで JAPSAM のメンバーとして計6回バランガイ・ソルソゴンを訪れている。JAPSAM はワークキャンプ期間中はバランガイ・ソルソゴンの中で生活をする。その生活の中で筆者が見たこと聞いたことからフィールドノートを作成した。2つ目は報告書、ミーティングの議事録である。これまでの JAPSAM の活動の中での筆者がつけた記録、JAPSAM の活動報告書、ミーティングの議事録などを過去ログとして用いたい。3つ目は聞き取り調査である。これは、筆者が JAPSAM のメンバーやバランガイ・ソルソゴンの人日との会話を記録し、それを調査のデータとして用いるということである。

第4章 結果と考察—Bさんはどうして妬まれることになったのか—

第1節 パトロンとしての JAPSAM

第1項 パトロンとしての JAPSAM

表1 JAPSAM の活動においてお金の必要だった活動とその費用

年、月	活動内容	費用
2002年3月		—————
2002年9月	運動場作り	¥100,000
2003年3月	職業訓練所建設(1回目)	¥120,000
2003年9月	職業訓練所建設(2回目)	¥250,000
2004年3月	職業訓練所建設(3回目), 水道管交換工事(1回目)	¥200,000
2004年9月	職業訓練所建設(4回目), 水道管交換工事(完成)	¥350,000
2004年12月	職業訓練所、建設業者との契約(2005年3月に完成)	¥1,000,000
2005年3月	地図作り、石饅作り	—————
2005年9月	SNPジム作り	¥100,000
2006年3月	劇、おもちゃ作り	—————

JAPSAM は Boissevain (1974) のいうところのパトロンである。そして、その役割としてこれまでバランガイ・ソルソゴンに対しさまざまな資源の提供を行ってきた。表1はこれまでの JAPSAM の活動の中で、お金が必要だったものと、その費用を表にしたのもである。表1を見れば分かるように、JAPSAM はこれまでの活動で多くのお金をバランガイ・ソルソゴンに提供してきた。

ここで、JAPSAM が訪れることによって、バランガイ・ソルソゴンやバランガイ・ソルソゴンに住む人にもたらされる利益を列挙してみたい。

a 施設

これまで JAPSAM はバランガイの人、全員に利益をもたらすようなものを作ってきた。例えば、職業訓練所や、水道管の交換、ラーニングセンターの立替えなどが上げられる。表 1 の費用のほとんどがこれらに費やされてきた。

b 雇用

JAPSAM の行ったこれまでの活動の中に職業訓練所の建設や水道管の交換工事などがある。これらの活動には、溶接や配電等、ある程度技術が必要なものであった。そのため、このような工事の際には、JAPSAM はバランガイの人を大工として雇い、賃金を払い活動を行ってきた。JAPSAM の活動はこれまで、いくつかの一時的な雇用を生んできた。大工の費用は表 1 に費用に含まれる。

また、大工の雇用だけでなく、JAPSAM は現地を訪れるときバランガイ・キャプテン (村長) の N さんの家に宿泊させてもらうのだが、その際、食事や洗濯といった身の回りの世話を、バランガイの人に行ってもらっていた。それも、バランガイの人を雇うという形で行っていたので、そこにも雇用は発生し、バランガイの人の臨時収入となっていた。

c 古着・文房具

日本の人たちの善意で集められた、古着や文房具を JAPSAM は毎回のワークキャンプでバランガイ・ソルソゴンに持っていき、バランガイに寄付をしてきた。

d 買い物

バランガイ・ソルソゴンに滞在中、JAPSAM のメンバーはお菓子やお酒といった嗜好品をバランガイの店で購入していた。これも、小額ではあるが JAPSAM がバランガイにもたらす利益といえることができるであろう。

e 謝礼

JAPSAM の活動は SAVE だけではなく多くのバランガイ・ソルソゴンの人によって支えられている。その中で、特にお世話になった人に対して、JAPSAM は謝礼金を渡してきた。しかし、この謝礼金はバランガイ全体の利益となっていないという意見が出たため、検討を重ねた結果、2005 年 9 月のワークキャンプ以降、謝礼金を SAVE に活動資金という形で渡すようにしている。それでも、個人的に渡さなくてはならないほどお世話になった人に対しては、JAPSAM がその人を雇ったという形にして、その賃金として渡すようにしている。

これで、JAPSAM は Boissevain のいうところのパトロンとして、第一次資源をバランガイ・ソルソゴンに対して提供しているということがいえる。

第2項 パトロンとしての JAPSAM への期待の高まり

このように JAPSAM がバランガイ・ソルソゴンを訪れると、必然的にバランガイに何らかの形で利益がもたらされる。この利益はバランガイ・ソルソゴンに住む人びとにとって、JAPSAM が訪れるまで、まったく想像していなかった利益であろう。

パトロンとしての JAPSAM に対する SAVE からの要求は活動年数が増えるに従い大きなものになっていった。活動初期の段階では、ラーニングセンターの敷地内でのものに活動は限定されていたし、活動自体もそれに必要なお金が 10 万円程度という比較的小額なものであった。それには、先輩たちの意向が反映されている。筆者の先輩 H さんはよく JAPSAM の活動に関して「自分たちで責任を負うことができる、手作りの活動をしていきたい」ということを語っていた。活動を始めた当初、先輩たちは JAPSAM の活動を、そのような活動にしようと考えていた。また、JAPSAM の活動も始まって間もないということもあり、バランガイに根付いていなかったというのも、活動規模が小さかったことの原因である。先輩の S さんはそのことを裏付けるように「私は、JAPSAM の初めてのワークキャンプのころからこの活動に参加している。はじめのころ、JAPSAM はソルソゴンの中でも、今、職業訓練所の建っている敷地の中で活動をしているという感じだった。それは JAPSAM とソルソゴンというより、JAPSAM と SAVE の B さんの関係という感じだった」ということを筆者に話してくれた。

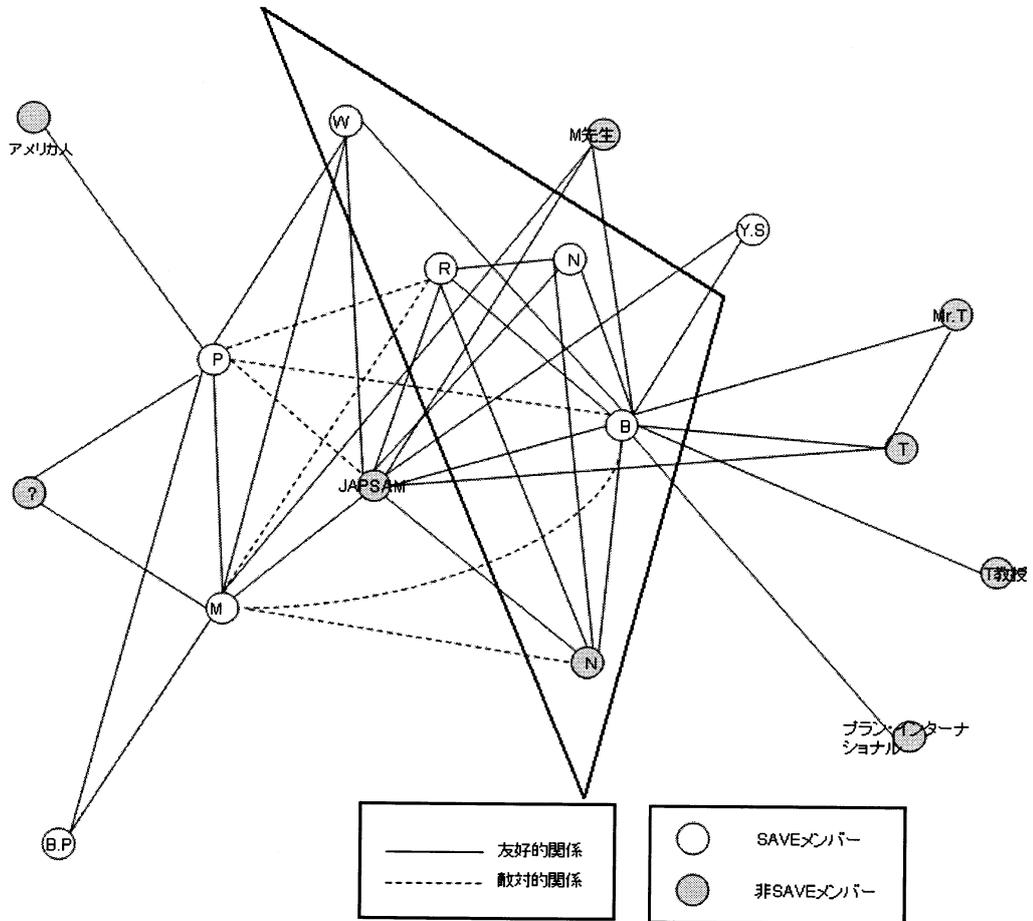
しかし、当初は H さんのような「自分たちの責任を負うことのできる、手作りの活動」という方針で活動をしていた JAPSAM も長年バランガイ・ソルソゴンと関わることにより、その活動の規模は大きなものとなっていった。費用の面についていうならば、例えば、2004 年 3 月から 9 月にかけて行った水道管の交換工事には、京都府国際センターからの助成金、ロータリークラブのソロプチミスト・わかば、街頭募金などの資金を活用し、全部で 50 万円ほどの費用が必要となった。2003 年 3 月から 2005 年 3 月にかけて行われた職業訓練所の建設工事にいたっては、ソロプチミスト・わかばから 100 万円の援助を受け、すべて合わせると 200 万近くの費用を必要となった。また、費用の面だけでなく、活動の範囲についても、S さんがいうように JAPSAM が活動を始めた当初は、「現在、職業訓練所の建っている敷地に限定されていた」ものが現在では、バランガイ・ソルソゴン全体を対象とした活動が行われている。例えば、バランガイの清掃活動であったり、バランガイの中にある小学校と提携して行う子どもたちの劇などがそれに当たる。

このように、JAPSAM の活動の規模が費用の面でも、範囲の面でも大きくなったということの背景には、JAPSAM の活動がバランガイの中に浸透し、その結果 JAPSAM に対する期待が高まったということがあると考えられる。その契機となったのは筆者は 2004 年 9 月のワークキャンプであったと考えている。このワークキャンプでは、先ほど述べた水道管の交換工事を完了している。その工事に、今までは JAPSAM の活動を遠巻きで見ているバランガイの人びとが参加をしてくれたのだ。それには水問題という生活に関わる活動を

JAPSAM が行ったということが要因の1つとしてあるかもしれない。しかし、やはり JAPSAM の活動がバランガイに浸透してきたということが一番の要因であると筆者は考えている。筆者の先輩の S さんはこのワークキャンプに関して「今回（2004年9月）ワークキャンプで本当に JAPSAM の活動がバランガイの中に浸透してきていると実感できた」といっていた。また筆者自身も村の子どもと話しているときに J 君から「JAPSAM がバランガイに滞在しているときに1年間で一番楽しい時期だ」といわれた。複雑な心境ではあったが、やはりこのようなバランガイの人々との会話の節々から JAPSAM の活動がバランガイ・ソルソゴン内に浸透しているということが実感できるワークキャンプであった。実際、それを裏付けるように2004年9月のワークキャンプ以降、それまで JAPSAM の活動を遠巻きに見ていた人が JAPSAM の活動に積極的に関わってくれるということが増えた。例えば、L さんという人は、JAPSAM が子どもたちと劇を行うとき、その指導を先頭に立って行ってくれた。他にも、バランガイの中にある小学校も JAPSAM と提携し、学校の美化活動をやりたいといってきてくれた。このように JAPSAM がバランガイ・ソルソゴンに関わる年月が増えるにつれ、JAPSAM へのバランガイ・ソルソゴンや SAVE からの期待は高まってきた。

第2節 <ブローカー>としてのBさん

図4 バランガイ・ソルソゴンにおける SAVE の内紛の中心人物を中心としたネットワーク図



第1項 SAVE の内紛の中心人物のネットワーク

ここで図4についての詳しい記述をしようと思う。図4は筆者の参与観察をもとに書いた、バランガイ・ソルソゴンにおける今回のSAVEの内紛の中心的人物たち（図でいうとBさんより左側に位置する人々とBさんのパトロン（Bさんより右側に位置する人びと）とのつながりを表すネットワーク図である。円の中を塗りつぶしていない人物がSAVEのメンバーである。また、大きな三角形の囲いの中にある人びとは親戚関係にある人びとで、P家という親戚グループである。RさんについてはP家と血のつながりがあるわけではないが、Bさんと姉妹関係にあるNさんと結婚したため、P家の人として数えている。以下ではそれぞれの人物についての詳細を記述しよう。

- ・ 「アメリカ人」はバランガイ・ソルソゴンに移住してきたアメリカ人で、現在Pさんの庇護者となっている。
- ・ 「？」は筆者と面識のない人物であるがRさんの情報によるとバランガイ・ソルソゴ

の住人で、MさんやPさんの相談役であるという。

- ・ 「B・P」はバイス・プレジデント。つまり SAVE の副会長のことで、現在マニラに在住である。筆者もまだあったことがない。SAVE の活動資金のほとんどはマニラで働くメンバーによってまかなわれている。マニラからの送金の責任者がバイス・プレジデントということになっている。
- ・ 「P」は SAVE の前会長である。Bさんと敵対関係にある。
- ・ 「M」は現在の SAVE の会長である。Bさんと喧嘩して以来、Bさんとの関係が悪化。
- ・ 「W」は 2006 年 9 月に結成された、職業訓練所の運営チームの責任者である。
- ・ 「R」は SAVE のボードメンバーである。JAPSAM の活動の際、大工としていつも活動に参加してくれる。
- ・ 塗りつぶされていない「N」は Rさんの妻で Bさんと姉妹関係にある。
- ・ 塗りつぶしてある「N」はバランガイ・キャプテン²⁾である。
- ・ 「M先生」は同志社大学の先生で、筆者の先輩に Tさんを紹介してくれた。
- ・ 「Y・S」は YOUNG SAVERS のことで現地の青年組織である。
- ・ 「Mr.T」はカルバヨグ市の社会福祉局長である。JAPSAM は彼から何度か、講義を受けたことがある。
- ・ 「T」は日本人で元カルバヨグ市の嘱託職員である。10 数年サマール島に関わり続けている。JAPSAM のよき相談役であり、自身も衛生問題と収入問題を結びつけたバイオガストイレ³⁾のプロジェクトを進行中である。
- ・ 「T教授」はカルバヨグ市にあるタンシンコ大学の教授で、専門はコミュニティー・デベロップメントである。
- ・ 「プラン・インターナショナル」はイギリスに本部を置く NGO でバランガイ・ソルソゴンでもその活動を行っていて、トイレの普及や、ラーニングセンター⁴⁾の校舎の建設などを行った。

このネットワーク図から何がわかるのか。まずその1つはBさんという人物のところに、ネットワークの線が集中しているということであろう。その線の数は図4だけでも11本ある。次に数の多いのは JAPSAM の 8 本であるが、JAPSAM は団体である。JAPSAM やプラン・インターナショナルのような団体を除外すれば、個人としてのネットワークの線の数は Bさんが圧倒的に多い。ここから、Bさんは明らかに人びとのネットワークの中核部分に位置しているということがわかる。

もう1つわかることがある。それは、Bさん、Mさん、JAPSAM の関係についてである。この3者の関係は JAPSAM と Bさん、Mさんの関係は良好であるのに、BさんとMさんの関係は悪いという不思議な関係にある。バランス理論で考えるならば、この3者はバランスしていない。だが、もともとこの Bさんと Mさんの関係は良好であった。つまり、それにより JAPSAM と Bさん、Mさんの関係はバランスしている状態にあった。しかし、

現在ではそうとはいえない関係になっている。

第2項 <ブローカー>としてのBさん

JAPSAMの活動はBさんと切っても切れない関係にある。JAPSAMの活動は、同志社大学の学生グループが、10年以上サマル島に関わり続けているTさんを、同志社大学のM先生から紹介してもらい始まった(2002年3月)。Tさんはサマル島(特にバランガイ・ソルソゴン)で活動を続けるBさんをJAPSAMに紹介してくれた。それはTさんがサマル島の州都、カルバヨグ市の市役所で属託の職員として働いているときにBさんがTさんのアシスタントとして働いており、TさんとBさんに信頼関係があったからだ。Bさんはサマル島のバランガイ・ソルソゴン出身である。彼女は筆者の先輩たちに「ラーニングセンターを何とかしたい、運動場を作ってほしい」ということをいった。それを受けJAPSAMは2002年9月から本格的な活動を始めた。

JAPSAMはサマル島のバランガイ・ソルソゴンを中心に活動を行っている。それは、Bさんという存在があったからからだ。Bさんは当時から、JAPSAMの現地のカウンターパートであるSAVEの渉外の係りについており、JAPSAMとSAVEやバランガイの人との仲介役を行ってくれていた。

JAPSAMはTさんにBさんとのつながりがあったからこそ、バランガイ・ソルソゴンという場所をフィールドとし、活動を行うことができていた。そもそもの話、Bさんという存在をなくしてJAPSAMはバランガイ・ソルソゴンで活動することができていなかったであろう。

JAPSAMの側からの視点で見れば、BさんはJAPSAMとバランガイやSAVEとの間に入ってさまざまな渉外を行ってくれる仲介役ということになる。では、逆にバランガイやSAVEにとってBさんとはいったいどういう人であるのだろうか。ここで必要となってくるのが「先行研究」で紹介したBoissevain(1974)の概念、<ブローカー>である。BさんはバランガイやSAVEの人とJAPSAMの間に立ち、JAPSAMに対してバランガイにとって有益となる資源を直接要求することができる。

JAPSAMのバランガイ・ソルソゴンでの活動は、多くの場合SAVEとのミーティングで何を行うかということを決定してきた。その決定の過程は3つのパターンに分けられる。

a SAVE→Bさん→JAPSAM

多くの場合、JAPSAMの活動はこの過程を通じて決定されてきた。それは、JAPSAMとのミーティングの前にSAVEがミーティングを行い、その結果をBさんがJAPSAMに伝え、調整を行い、後日JAPSAMとSAVEとのミーティングで活動を決定するというものだ。その例には、ラーニングセンターの敷地の整備、職業訓練所の建設、水道管の交換工事などがある。

b Bさん→JAPSAM

2番目はBさんがやりたいと思ったことを、Bさんが直接 JAPSAM と話し合うというパターンである。そして、このことは後日の JAPSAM と SAVE とのミーティングで承認される。例としては Mr.T との話し合いなどがあげられる。

c JAPSAM→Bさん→SAVE

最後のパターンは、JAPSAM がやりたいと思ったことを B さんに伝え、それを B さんが SAVE のミーティングで SAVE に伝え、調整を行うというパターンである。このパターンも後日 JAPSAM と SAVE とのミーティングで決定される。例は劇、石けん作りなどだ。

3つのパターンを見て明らかなのは、そのすべての決定過程で B さんは JAPSAM と SAVE の間に立っているということである。

Boissevain (1974) によれば、〈ブローカー〉はコミュニケーションの架け橋となる存在であるという。そのことを B さんに当てはめると、B さんは確かに JAPSAM と SAVE との仲介、調整役となっており、2者間のコミュニケーションの架け橋となっている。B さんは balan-gai・sol-so-gon や SAVE の人にとっては確かに JAPSAM というパトロンと彼らを結びつける〈ブローカー〉なのである。ただし、Boissevain (1974) は〈ブローカー〉は自分の利益のために人々を結びつけるといっているが、B さんの場合にはそれが「balan-gai・sol-so-gon の人びとの生活水準の向上」ということになる。B さんは SAVE や balan-gai・sol-so-gon の人びとにとって〈ブローカー〉ということになるが、このことが JAPSAM のメンバーと SAVE や balan-gai・sol-so-gon の人びととの間のコミュニケーションは B さんと通さないとできないということを意味しているのではない。むしろ、JAPSAM のメンバーと SAVE、balan-gai・sol-so-gon の人びとは親密な関係にある。そのことに関しては、筆者自身も balan-gai の人の家に個人的に呼ばれ一緒にお酒を飲んだり、筆者と仲のいい balan-gai の青年のバイクの後ろに乗せてもらい小旅行をした経験など、語りつくせないほどのエピソードがある。

しかし、ことがひとたび JAPSAM の balan-gai・sol-so-gon での活動のこととなると話は変わってくる。JAPSAM の側では balan-gai・sol-so-gon での活動に関するミーティングを現地で行うと何か疑問点が出た場合などは「とりあえず、B さんに聞いてみよう」ということになる。また、JAPSAM が日本にいるときも、JAPSAM と SAVE の両者のミーティングで話し合われたことや次回の活動に必要な資金の見積もり等の連絡事項は B さんが窓口となり、メールや電話、手紙などの手段を用いて連絡を取り合ってきた。逆に SAVE の側はというと、SAVE の B さん以外のメンバーから活動に関する要求や提案をほとんど聞いたことがない。SAVE から JAPSAM の要求や提案のほとんどはこれまで一貫して B さんを通して行われてきた。このように JAPSAM、SAVE の両者の意思疎通はほとんどの場合、出された意見がいったん B さんに集約されるという形で行われてきた。このことから B さんは SAVE にとってただの JAPSAM との連絡窓口ではないということがわかる。

また、JAPSAM と SAVE との関係だけでなく、JAPSAM と balan-gai との関係におい

てもさまざまな場面で B さんは〈ブローカー〉として機能してきた。例えば、JAPSAM は現地に滞在している際に、身の回りの世話をバランガイの人を雇うという形で行ってもらう。それは、洗濯であったり、食事の世話であったりという類のものだ。このとき、誰が JAPSAM の身の回りの世話をするのかということは、B さんが決めている。また他にも、バランガイにある公立小学校の校舎のペンキの塗り替えを要請されたとき（2006 年 7 月）も B さんを通して JAPSAM へ要請があった。

これまでで、B さんは SAVE やバランガイ・ソルソゴンの人びとにとって〈ブローカー〉であるということを述べてきた。では、「先行研究」で取り上げた、Boissevain (1974) の述べる、ある人物が〈ブローカー〉になるための基準に B さんを当てはめるとどういうことになるのだろうか。

a 中心度

中心度については、これまでの説明でも明らかなように、JAPSAM と SAVE、バランガイのネットワークの中で B さんは中心に位置しているということがわかる。JAPSAM がバランガイ・ソルソゴンで活動する際、ほとんどのコミュニケーションはいったん B さんに集積され、出力される。JAPSAM との関係においてだけではなく、B さんはバランガイ・ソルソゴンにおいてコミュニケーションの中枢の位置を占めている。それは表 1 を見れば明らかなことだ。多くの人の関係の線が B さんのところに集まっている。B さんはバランガイ中心度については B さんは〈ブローカー〉として申し分ない位置にいるといえよう。

b 時間

B さんは JAPSAM が現地に滞在している間、JAPSAM のために身を削って動いてくれる。2006 年 9 月のワークキャンプの際も、筆者が B さんが疲れた顔をしていたので、「B さん大丈夫ですか」と聞いたところ、「3 時間寝たから、大丈夫。私は強いから」と答えた。また別の日に同じことを聞いたら、「さっき少し眠ったから大丈夫」と答えた。このような、B さんが JAPSAM のワークキャンプ中に動き回ってくれるという話はこれまでも JAPSAM のさまざまなメンバーから聞いてきた。

また JAPSAM のワークキャンプ中以外のときも、レイテ島で行われる NGO ワーカーに関するセミナーやプラン・インターナショナルの事業などさまざまな活動を行い、それに時間を割いているという B さんからの E メールによる報告もよく耳にする。B さんは〈ブローカー〉として動くための時間を無理やり作り出している。

c 権力

B さんは現在バランガイ・ソルソゴンではなく、州都カルバヨグ市に住んでいる。しかしながら、バランガイ・ソルソゴンの村議会議員である。そのため、ある程度の権力を持っているということはいえるかもしれない。しかし、Boissevain (1974) のような第一次資源への統制力という意味での権力ということになると話は別だ。B さんは現在、夫と離婚しているため家族を養わなくてはならない（子どもが 4 人いる）。しかし、B さんは定期

的な仕事についていない。そのような B さんの現状を考えると、B さんの第一次資源への統制力はほぼ皆無であるといっているかもしれない。Boissevain (1974) のいう第一次資源への統制力という意味での権力を B さんは持っていない。

しかしながら、B さんと親類関係にある現バランガイ・ソルソゴンのバランガイ・キャプテンの N さんは大土地所有者である。しかも、N さんと B さんは極めて親密な仲にある。2006 年 9 月のワークキャンプ時にも N さんは B さんがいかにすばらしい人間であるかということ語ってくれた。また、N さんを中心とする親類グループ P 家には世間一般で優秀とされる人が多く、マニラにある大企業で働く人や医者などの人材を輩出している。

このことは何を意味するのか。それは B さん自身はバランガイ・ソルソゴンにおいて第一次資源への統制力という意味での権力は持っていないが、バランガイの中で権力を持つ N さんや、世間一般で優秀とされる P 家の人と親戚関係にあるということで SAVE やバランガイの人びとと N さん、P 家とのコミュニケーションの架け橋となることができる。つまり、B さんはバランガイの人びとと N さん、P 家の人びととの関係においても〈ブローカー〉となっているのである。これは B さんの〈ブローカー〉としての適正を述べる際にも述べたことだが、以上の説明で B さんは、JAPSAM との関係においてだけ〈ブローカー〉の役割を果たしているのではないということが分かる。図 4 を見ればわかるように、B さんはイギリスの NGO であるプラン・インターナショナルとの関係においても〈ブローカー〉となっている。それだけでなく、先ほども述べたが、図 4 のネットワーク相関図を見る限り、B さんにネットワークの線が集中しているのがわかる。すなわち、B さんのバランガイ・ソルソゴン内における中心度は非常に高い。先に述べたが、〈ブローカー〉としての B さんはバランガイ・ソルソゴンにおいては、人びとのコミュニケーションの中核にいるのだ。さらに、B さんは〈ブローカー〉として働くための時間を無理矢理作り出している。また、第一次資源への統制力という意味での権力は持ち合わせていないものの、B さんは〈ブローカー〉として十分に機能するということがいえる。

ここで〈ブローカー〉としての B さんがどれほど機能しているかということ JAPSAM を例に取り述べようと思う。B さんはバランガイ・ソルソゴンにおけるコミュニケーションの中核として、多くの情報、要求を JAPSAM にもたらす。先述の JAPSAM が活動を決める際、JAPSAM と SAVE との間に入りその窓口となる。また、JAPSAM が 2005 年 9 月のワークキャンプの際に NGO 組織論の勉強をしたいという希望を出したところ、JAPSAM のために自分のコネを利用し、州都カルバヨグにあるタンシンコ大学でコミュニティーデベロップメントを教える、T 教授のセミナーをセッティングしてくれたり、Mr. T というカルバヨグ市の社会福祉局長との話し合いをセッティングしてくれたりもした。また、2004 年 9 月と 2005 年 3 月のワークキャンプでは JAPSAM のメンバーはフィールドワークのために、バランガイ・ソルソゴンの一般家庭にホームステイをしたことがある。このときも B さんのコネからホームステイ先の家のセッティングが行われた。B さんはバランガイ・ソル

ソゴンでのコミュニケーションの中心的な位置にいただけでなく、バランガイ・ソルソゴン以外の場所でも多くの人とのつながりを持ち、それを利用しようと思えばいつでも利用可能な第二次資源としている。その B さんの持つネットワークの広がりには筆者にも想像がつかない。

このように B さんはバランガイ・ソルソゴンで、コミュニケーションの中枢に位置し、その位置を利用することにより、〈ブローカー〉としての役割を果たしている。また、それだけでなく、バランガイ・ソルソゴン以外での場所でも、第二次資源と呼ぶことのできるネットワークを持ち、必要あらばその資源を利用し、〈ブローカー〉としての役割を果たしているのである。

第3節 行為セットからファクションへ

第1項 行為セットからファクションへ

JAPSAM の活動方針は「バランガイ・ソルソゴンの人びとの手による、バランガイの持続可能な運営のための支援」である。しかし、その支援がある意図せざる結果を生んでしまった。

ほんの 1、2 年前までは、SAVE はコアリッションの形態でいうと行為セットに当てはまる団体であった。「フィールドの概要」で記述したが、その共通の目標は「バランガイ・ソルソゴンの活性化」というもので、この目標に賛同するものが自発的に結びついた団体が SAVE である。その目標に向かい、SAVE は活動を行ってきた。しかし、この 1、2 年の間でそのコアリッションの形態が行為セットからファクションへと変化してしまった。Boissevain (1974) は、対抗的な状態が、ファクションが存在するための基盤であると述べている。SAVE の場合、対抗的な状態とは「B さんを中心とする P 家とそれに近い人たち」対「M さん、P さんを中心とする反 P 家の人たち」のことをあらわす。

争いの原因は、B さんや P 家の人びとに対する M さんや P さんの個人的な妬みであると思われる。

M さんは 2003 年 9 月のワークキャンプ中に JAPSAM の H さんと Y さん呼び出し。ワークキャンプごとに JAPSAM が持っていつている古着について「B さんが古着を独り占めにしている」と述べた。それまで JAPSAM は持っていつた古着を B さんに託し、ソルソゴンの人に配るようにはしてもらっていた。そのことを聞いてから思い出すと確かに配った古着をソルソゴンの人が着ているのを JAPSAM の人はあまり見かけていない。B さんが古着を独り占めにしていたかどうかについてははっきりしたことはよくわからない。しかし、B さんにだけ古着が託されるということを M さんがよく思っていなかったことは事実である。この古着の一件から B さんと M さんの関係は序々に悪くなりだした。

さらにその後、B さんと M さんの対立が決定的になった。それは、T さんが 2005 年に

ソルソゴンに作ったバイオガス施設の土地の所有権を巡ってのことだ。TさんはJICAの支援を得てバイオガス施設をサマール島の2箇所に建設した。そのうちの1つがバランガイ・ソルソゴンに建設された。Tさんは2006年にバイオガスの土地の所有権をバランガイ・ソルソゴンに移すつもりで、それまでは便宜的にBさんを土地の所有者とした。しかし、これを知ったMさんはそのことに怒りをあらわにした。MさんはBさんがバイオガスの土地所有者となり、また古着の時のようにP家の人ばかりが得をしようと思ったらしい。そして、2005年3月のワークキャンプではそれまでのワークキャンプの時にはワークキャンプ期間中に毎日のようにJAPSAMのところへ足を運んでいたMさんはまったく顔を出さなくなり、最終日にMさんが信頼を置くYさんとHさんを個人的に呼び出し、「もうBにはついていけない。僕はSAVEのプレジデントを辞める」といった。そしてMさんは本当にSAVEのプレジデントを辞めてしまった。

Mさんがプレジデントを辞めた後、SAVEのプレジデントはPという人（P家の人ではない）になった。Pさんは一言で表すとプライドが高い人だ。その背景にはPさんが少年期をアメリカで過ごしたため、アメリカで教育を受けたということがある。だから、ソルソゴンの人を「田舎者」として見下した態度を取る。つまりアメリカに住んでいたということをPさんは1つのステータスと考えているのだ。また、彼はバランガイ・ソルソゴンに住むアメリカ人と親密で、このアメリカ人はPさんの庇護者となっている。また、このことでPさんはそのアメリカ人とバランガイ・ソルソゴンの人びとをつなぐ<ブローカー>となることもできる。

そして、PさんもBさんのことをよく思っていない。JAPSAMのSさんがソルソゴンに3ヶ月ほど滞在したことがあったが、その際にPさんと話すとBさんの悪口をよく聞いていたという。この原因の1つとしてはPさんのBさんに対する妬みがあると思われる。つまりこういうことだ。Pさんは英語は堪能かもしれないがあまりJAPSAMのところに顔を出さないし、JAPSAMと何かをする際、自分から率先して動いてくれるわけではない。SさんによるとPさんはソルソゴンの人から「口だけの人」と思われているということだ。一方、Bさんは本当にJAPSAMのためによく動いてくれる人で、英語も堪能だ。例えば、JAPSAMとSAVEの間に入り活動を行う際の調整役をしてくれる。はっきりいうのなら、BさんなしにJAPSAMの活動は成り立たない。そのためJAPSAMはどうしてもBさんを頼りにしてしまう。このことがPさんは気に食わないのだ。Pさんはプライドが高い人であるから、自分にもっと注目が集まって欲しいと思っているのに、Bさんにばかり注目がいく。そのためPさんはBさんにいい感情を持っていないのだ。そしてそんなPさんの態度に対し、BさんもPさんの悪口をいうようになった。

Bさんのことをよく思っていないPさんは2005年9月のワークキャンプ以降、BさんのSAVEからの排除に力を注いだ。例えば、きちんとしたものなかったSAVEの組織図を2005年3月にBさんが作成した時、Pさんはそれを無効なものとしたり、PさんのSAVE

のプレジデントとしての任期が切れた時、プレジデントを選ぶ SAVE 内の選挙が行われ、その時に SAVE のボードメンバー⁵⁾を選び直す選挙も行われたのだが、その際にそれまでボードメンバーであった B さんを落選させた。また、このときの選挙では、それまでボードメンバーであった P 家に関係するほとんどの人が落選をしている。つまり、SAVE 内で B さんだけではなく、P 家の人々の排除も行われたのだ。R さんという人がいる。R さんは SAVE のボードメンバーの 1 人だ。R さんの妻 N さんは B さんと姉妹の関係になり、R さんは婿に入る形で N さんと結婚したので R さんは P 家の人ということになる。選挙では一応はボードメンバーとして当選したものの R さんは「僕は一応 SAVE のボードメンバーだけど、SAVE のミーティングに参加してない。それは誰もミーティングがいつどこで行われるか教えてくれないからだ。こんな状態だから、次のボードメンバーの選挙は僕も落選すると思う」と 2006 年 9 月のワークキャンプで話してくれた。このように、R さんも P 家と関わりを持つため SAVE から排除されようとしている。このような状況の中、B さんはついに SAVE を辞めてしまった。

第2項 何に対する妬みか

B さんへの妬みは何に起因するものなのか。それは、B さんに第二次資源が集中しているからであると考えられる。「<ブローカー>として B さん」の項でも説明したが、B さんという人物はバランガイ・ソルソゴンの中でコミュニケーションの中核部分に位置している。そのため、バランガイ・ソルソゴンにもたらされる第一次資源は B さんという<ブローカー>を介してもたらされるということが少なくない。また、JAPSAM からもちこたえられる第一次資源はもちろんのことであるが、B さんはイギリスの NGO、プランインターナショナルの活動をバランガイ・ソルソゴンに持ち込んできた人物でもある。B さんはここでも<ブローカー>としての役割を果たしている。B さんは第二次資源としてのプランインターナショナルを利用し、バランガイ・ソルソゴンの家庭にトイレを配り、その普及率を 5 割にした。T さんがバランガイ・ソルソゴンをバイオガストイレの建設地として選んだのも、B さんとのつながりが T さんにあったからだ。このように、B さんが<ブローカー>として活動することでさまざまな第一次資源が、つまり何かしらの利益がバランガイ・ソルソゴンにもたらされてきた。

Boissevain (1974) は、<ブローカー>がその経歴を重ねていく際、クライアントからの信用を確立しなくてはならないと述べている。そのためにはクライアントに対して<ブローカー>は利益をもたらさなくてはならない。この Boissevain (1974) が述べていることを B さんに照らし合わせると、B さんはこれまで、JAPSAM との活動などを通して、バランガイ・ソルソゴンの人々に、多くの利益をもたらしてきたため、バランガイ・ソルソゴンの人びとからの信用は十分過ぎるほどあるといえる。今や B さんはバランガイ・ソルソゴンの人びとにとっては、バランガイに利益をもたらしてくれる、バランガイになくて

はならない存在であるのだ。

皮肉なことであるが、妬みの原因はここにあると筆者は考えている。Bさんがバランガイ・ソルソゴンにとってなくてはならない存在であるがゆえに、それをよく思わない人物が出てくるのだ。それが例えばMさんであり、Pさんなのである。Mさん、Pさんとは関係ないが、以前Bさんに関して変な噂が立ったことがある。それは、「現在のバランガイ・キャプテンであるNさんのバランガイ・キャプテンとしての任期がそろそろ切れそうになっていて、その後任としてBさんが次のバランガイ・キャプテンの座を狙っている。そのために、Bさんはバランガイのための活動を行っている」という内容の噂であった。噂は誰かが広めなくては広がらない。この噂は誰が流したかは分からないが、誰かが流したということは確かなことであろう。そして、その人物はBさんのことをよく思っていないということも確かなことだ。

また、この他にもP家の中心人物であり、現在のバランガイ・キャプテンのNさんとBさんに関して、「日本人（おそらくJAPSAMやTさん）から不正なお金を受け取っている」という噂がバランガイの中で立ったこともあった。この噂は、JAPSAMが現地に滞在する際、Nさんの家にホームステイをさせてもらったり、Bさんといつも一緒にいるからということにあると筆者は考えている。NさんやBさんはあまりにJAPSAMとのつながりが深いのだ。また、この不正なお金の受け渡しに関する噂に関しては、そう思われても仕方がないと思う節がある。もちろんJAPSAMは不正なお金をNさんやBさんに受け渡したことはない。しかし、現地に滞在している間、JAPSAMはNさんの家に泊まらせてもらったお礼として、いくら現金を渡している。さらに、BさんにはJAPSAMが現地滞在に必要なもの、例えば食料や生活雑貨などの買い物や、現地の大工やJAPSAMの身の回りの世話をしてくれる人への給料をまとめて渡し、支払ってもらっている。また、職業訓練所に必要な建築資材の注文などの際にもBさんに付き添ってもらう。NさんやBさんは、特にBさんに関してであるが、JAPSAMと一緒に行動するとお金が動く場面に出くわす機会がどうしても多くなってしまふ。これを傍目から見れば、その中で不正なお金の受け渡しが行われているかもしれないと思われるのは不思議なことではない。以上のようなことは、BさんとJAPSAMの関係だけではなく、Bさんとプランインターナショナル、BさんとTさんといったBさんが<ブローカー>として関わる多くのパトロンとの関係でもいえると筆者は考えている。そのようにBさんがバランガイ・ソルソゴンの人びとに見られているからこそ、Mさんがというような「またP家が得をする」という意見が出てくるのだ。

Bさんへの信用が高まるということは、バランガイ・ソルソゴンの人びとの注目がBさんにいくということも意味する。JAPSAMなどのパトロンに何かをしてほしいとき、まずはBさんに相談してみようということになる。そのことも、MさんやPさんにとっては気に食わないことではないのだろうか。特にMさんについては、SAVEのプレジデントであるMさんが中心となってJAPSAMと活動をできないということが、Mさんの自尊心を傷

つけているのではないかと思われる。後ほど詳しく述べるが、それは2006年9月のワークキャンプの際の話である。このワークキャンプでは以前建設された職業訓練所の運営チームの結成が行われた。その際、運営チーム結成に関するバランガイ、SAVE、JAPSAMの3者による契約書のサインを行ったのだが、SAVEのプレジデントであるMさんがサインをすることを拒み続けた。しかし、JAPSAMが帰国する前の晩になって筆者1人がMさんに呼び出された。筆者と酒が飲みたいとのことであったが、酒を飲んでいるとサインの話になった。そして彼は筆者に「これは秘密にしておいて欲しいのだが、明日サインをした契約書を持っていく」といいだした。理由を聞くと「みんなを驚かせたい」とのことだった。さらに「自分がこの契約について、話し合いのコントロールしたいんだ」といい出した。それまでMさんはこのようなことを一言も口にしてこなかった。しかし、このようなことを少なからずも思っていたのではないだろうか。その本音が酒を飲んだことにより飛び出してきたのではないだろうか。おそらくMさんはSAVEのプレジデントである自分のところにBさん以上のバランガイ・ソルソゴンの人びとからの信用を集めたいと思っているし、JAPSAMからの相談があればと思っている。しかし、それがBさんに集中してしまっているため、Mさんはそのことにも嫉妬しているのではないかと考えられる。

Bさんへの第二次資源の集中は、Bさん、ひいてはP家への妬みという形で意図せざる結果を招いてしまった。

第5章 関係改善に向けて一結論に変えて一

第1節 反省

第4章で得た結論はBさんに第二次資源が集中しすぎてしまったため、それがBさんへの妬みを生む結果となってしまったというものであった。裏を返せば、JAPSAMを代表とするパトロンがBさんに第二次資源を集中させすぎてしまった、つまりバランガイ・ソルソゴンで活動する際にBさんに頼りすぎてしまい、それがBさんへの妬みにつながったということがいえる。

このことがJAPSAMのこれまでの活動を振り返った今、大きな反省点である。確かにJAPSAMにパトロンとしてのJAPSAMがバランガイ・ソルソゴンの中でどう見られているかという意識は多少なりともあったかもしれない。そして、メンバーの中ではBさんに頼りすぎてしまうのはよくないという思いもあった。それはJAPSAMはバランガイの中で中立の立場にいたってはならないというメンバー間の暗黙の前提があったからだ。表1を見るとJAPSAMから出るネットワークの線はPさんを除いてすべて友好的関係を示す実線で書かれている。Pさんについても、JAPSAMは敵対的な関係にあるというよりも、関係が薄いといったほうが近い。ここにはJAPSAMのメンバーのバランガイ・ソルソゴンの中で中立な立場にしようとする心理が表れてはいないだろうか。つまり、それは誰かに肩入れ

せず、バランガイ・ソルソゴンの人びとすべてと友好的であろうという姿勢だ。しかし、実際はそうではなかった。JAPSAM が何かにつけて、B さんに頼るうちに、B さんとの関係ばかりが深まり、M さんのような人からの B さんへの妬みを生み出す結果となってしまった。

その結果、JAPSAM でのバランガイ・ソルソゴンでの活動に支障が出てきてしまった。それが特に顕著だったのが、B さんが SAVE のメンバーを辞めてしまって以降の 2006 年 9 月のワークキャンプである。先ほども述べたが、このワークキャンプでは、職業訓練所の所有権をそれまでの JAPSAM からバランガイ・ソルソゴンに委譲し、運営をバランガイの住民でより機能的に行うための職業訓練所の運営チームを結成した、このチームのメンバーは SAVE とバランガイの役員から選出された。このとき、運営チーム結成のための契約をバランガイ、SAVE、JAPSAM の 3 者で交わした。また、このとき B さんを運営チームをチームとして組織するためのトレーナーとして JAPSAM が雇うという契約を結んだ。B さんとの契約というのは、運営チームが組織として機能できるまで、B さんに権限を集中し、2006 年 9 月からの 3 年間、B さんが運営チームのトレーニングを行い、その権限を B さんに与えるというものである。しかし、これが M さんや P さんといった人びとの反発をよんだ。そのため、M さんは運営チーム結成のために JAPSAM が用意した契約書になかなかサインをしてくれなかった。また、SAVE が独自に作成した契約書を JAPSAM に渡してきたりもした。この契約書では B さんの権限が弱いものとして扱われたり、運営チームは職業訓練所の所有権のあるバランガイからの運営に対する干渉を受けないという内容のものであった。やはり M さんとしては B さんに強い権限があったり、P 家の中心人物である N さんがキャプテンを勤めるバランガイから運営チームへの干渉があるということをよく思わなかったであろう。その後、結局 M さんは JAPSAM の用意した契約書にサインをしてくれた。しかし、サインはしたものの、2006 年 12 月現在、運営チームが動き出したという報告をいまだに B さんから聞いていない。

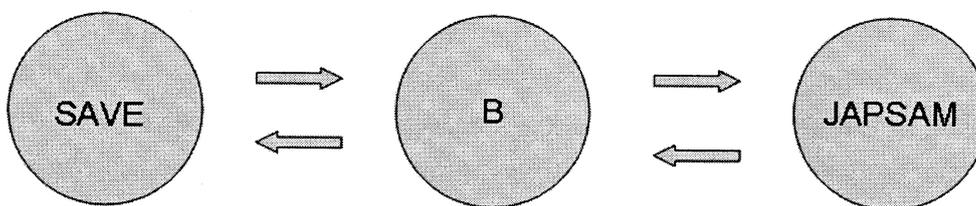
また、このワークキャンプ中 SAVE は JAPSAM の活動にほとんど参加してこなかった。村の清掃活動を行ったときも、前日にプレジデントである M さんに SAVE のメンバーに声をかけてもらったのにも関わらず、1 人も参加者がいなかった。それどころか、M さんも参加しなかった。SAVE と JAPSAM のミーティングを行ったときも参加者は M さんだけであった。では SAVE は何をしているのであろうか。それを T さんに聞くと、「バスケットボールの大会ばかり開いている」といっていた。それを象徴するかのよう、この時のワークキャンプでは SAVE の 14 周年記念パーティーがなぜか盛大に行われ (T さんによると 10 周年のとき以来の盛大さであるという)、バスケットボール大会の表彰式が行われていた。その際、成績のよかったチームや選手には商品や賞金が渡されていた。この商品や賞金のための資金の出所は T さんによるとマニラに住む SAVE のバイス・プレジデントであるとのことだ。もちろんそんなことがそれ以前のワークキャンプで行われたことはなかった。

今や、SAVE はバスケットボール大会以外のことをやらない団体となってしまった。それはやはり、Bさんという SAVE と JAPSAM とをつなぐパイプ役を失ったことが原因である。Bさんというパイプ役がいたからこそ、JAPSAM の活動はこれまでスムーズに行うことができていたのだ。

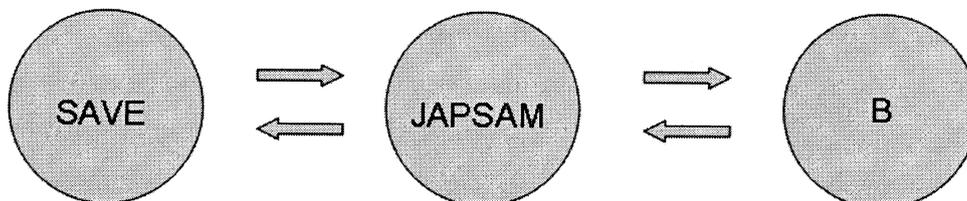
2006年9月のワークキャンプ中に JAPSAM のメンバーである、Yさんがいったことが今の状況をうまく表していると思う。Yさんは「これまでは Bさんが SAVE と JAPSAM との間に入り活動がスムーズになるようにしてくれていたけど、これからは JAPSAM が SAVE と Bさんの間に入り2者の関係を取り持つようにしなくてはならない。そのために、これまで以上に JAPSAM はソルソゴンの中で中立な立場を取るための努力をしなくてはならない」といっていた。そのことを図解すると次のような図となる。

図5 SAVE と JAPSAM の関係の変化

SAVEの内紛以前



SAVEの内紛以後



第2節 関係改善に向けて

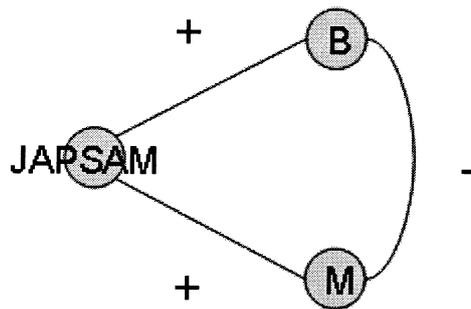
JAPSAM がこれからも balan-gai・sol-sogon で活動を行うためには現在のような状況は、活動を行う上で大きな障害となる。それは前述した 2006年9月のワークキャンプの様子からも明らかであろう。やはり現状の打開をしなくてはならないだろう。ここでは、これから筆者が考える、これからの JAPSAM がとるべき戦略を結論に変えていくつかあげて

みたいと思う。

その前に、ここでMさんについて考えてみたい。Mさんは2005年の1年間を除いて、SAVEが本格的な活動を balan-gai・sol-so-gon で始めた1997年から、これまでずっとSAVEのプレジデントであった。このことは、SAVEのメンバーからMさんへの信頼を意味していると考えられる。それと同時にMさんは現在、balan-gaiの議員でもある。このことから、Mさんは balan-gai・sol-so-gon の人びとからの信頼もあるということがいえる。そう考えると、MさんはSAVEにおいても balan-gai・sol-so-gon においても重要人物ということができる。

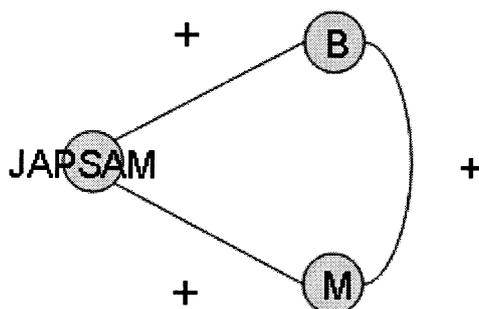
先ほど、図4について詳しいことを記述した際、述べたのだが現在Bさん、Mさん、JAPSAMの関係はバランス状態になく、不安定な状態にある。そのため、この3者の状態はこう着状態にある(グラフ4)。Fararo(1973)の紹介したHeiderのバランス理論の原理3に従うのならば、この状況の変化が不可能ならば3者関係に緊張が生じる。さらにFararo(1973)によると、「システムがインバランスな状態にいる時間の長さとともに緊張が増加する(Fararo 1973: 61)」という。このFararo(1973)の理論をJAPSAMとBさんとMさんの3者の関係に当てはめると、3者の関係がこのまま図6の状況から変化しなければ状況はさらに悪化するということを示している。JAPSAMが balan-gai・sol-so-gon で活動を続けるのならば、現在のようなこう着状態のままでは、望ましいこととはいえない。

図6



何度も述べていることだが、これまで、JAPSAMの活動はJAPSAMとSAVEの間にBさんが入ることでスムーズにその活動が行われてきた。そして、SAVEの中心にはいつもMさんが位置し、Bさんとのコミュニケーションを行ってきた。また、Mさんという人物は、SAVEのリーダーや balan-gaiの議会の議員という人びとの信頼がなくてはできない役割に就いているということから、 balan-gai・sol-so-gon においてBさんほどとはいえないものの、人びとのコミュニケーション回路において重要な部分に位置しているということがいえる。そう考えた上で、筆者は現在の状況を打開するために、まずなくてはならないことはBさんとMさんの関係を改善することであると考えている。その結論をいうのならば、それは図6の状況を図7の状況へと変化させるということである。

図7

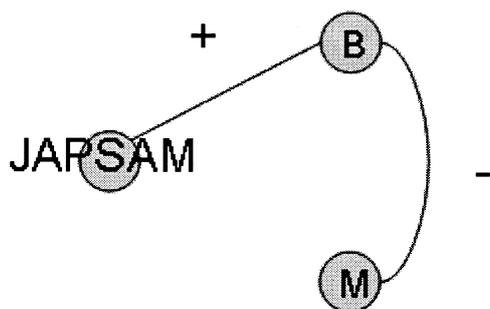


しかし、図6のような状態になってしまった原因はBさんとMさんが喧嘩したというところにある。現在悪い関係にある2人の状態が、このまま放っておいていい関係へと勝手に変化することはないだろう。というより、放っておいたら2者の関係は悪化するばかりであろう。

筆者は現在のこの状態を打開するためには、JAPSAMが何かしらの戦略を練り、実行しなくてはいけないと思う。そのいくつかの戦略はバランス理論から筆者が考えたものだ。以下にそれを記述しようと思う。

a Mさんとの関係を断ち切る

図8



これはJAPSAMがMさんとの関係を断ち切って、Bさんとともに活動をしていくというものだ。図解すると図8のような状態を示す。これは、これまで、JAPSAMは<プロカー>としてのBさんに頼り、Bさんのネットワークに助けられ活動を行ってきた。SAVEとの関係においては、BさんがJAPSAMとSAVEの間に仲介役として入ることで、活動がスムーズに行われていた。しかし、今やBさんはSAVEのメンバーではなくなってしまった。そこで、今後はBさんの持つ第二次資源を最大限に利用するために、JAPSAMがMさんとの関係を断ち切り、Bさんとの関係により重きをおくようにしてはどうかという提案である。これによりJAPSAMとMさんとの関係がなくなり、JAPSAM、Bさん、Mさんのサイクルはなくなり、3者の間に生じた緊張はなくなる。

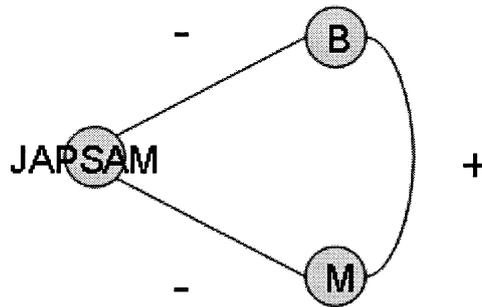
この提案においてMさんとの関係を断ち切るということには大きなリスクがある。Mさんとの関係を断ち切るということは、SAVEとの関係を断ち切るということを意味する。そ

うなったとき、 balanガイ・ソルソゴンの人びとはどのような反応を取るのでしょうか。おそらく、SAVEのメンバーと親しい関係にある人びとも balanガイ・ソルソゴンの中には多いただろう。Mさんとの関係を断ち切ることによって、彼らと JAPSAM との関係も断ち切られてしまう可能性もある。それどころか悪化してしまう可能性もある。この提案を実行するのならば、そのリスクについて考えた上で実行するべきであろう。

またこれとは逆に Bさんとの関係を断ち切るという選択も考えられるが、これまでの JAPSAM の活動を振り返り、Bさんという人物の重要性、また JAPSAM と Bさんとの関係等を考えると、Bさんとの関係を断ち切るという選択は筆者はあまり現実的といえる選択とは思えない。

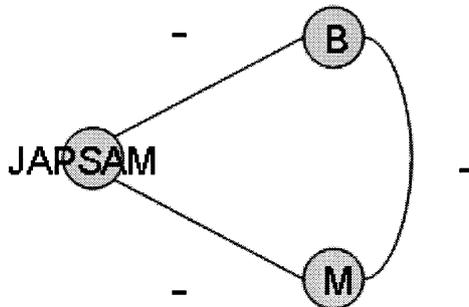
b いったん JAPSAM と Bさん、Mさん両方との関係を悪くする

図 9



この提案は JAPSAM が一時的にわざと Bさん、Mさんとの関係を悪くし、図7の状態を図9の状態にするというものである。関係を悪くするというのは、JAPSAM と Bさん、Mさんとの仲を悪くするというよりも、いったんこの2者との関係を疎遠なものとするということだ。そこに、JAPSAM からの「このままの状態にいるのならば、JAPSAM は balanガイ・ソルソゴンでの活動をやめる」というメッセージをこめるのである。

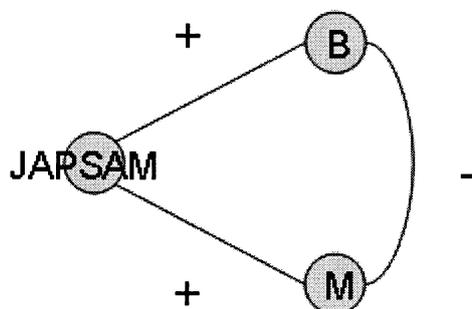
図 10



そうして、図10のような状態を作り出す。この状態も、サイクル中の符号の積が正とならないので、3者はバランスしていない状態になる。ここで、Fararo (1973) の紹介する Heider のバランス理論では、インバランスな状態がバランス状態になろうとする。図10の場合は、3つの符号のうち1つが+となれば、サイクル中の符号の積は正となるので、バランス状態

になることができる。このとき、JAPSAM から B さん、M さんのどちらかに対して、+ となるような関係を結ぼうとしなければ、理論上は必然的に B さんと M さんが+の状態になろうとするであろう（図 11）。そうなったときに、JAPSAM が B さん、M さんと、また以前のような関係になるようにすれば、図 7 のような理想的な状態を再び作ることができる。

図 11



しかし、この提案にも B さんと M さんが+の状態になろうとしないかもしれないというリスクが伴うことを忘れてはならない。

c 撤退

あまり望ましいものとはいえないかもしれないが、JAPSAM が balan-gai・sol-so-gon から撤退するというのも選択肢の 1 つであるということを述べておこう。これは無責任な選択かもしれないが、現在の八方塞がりの状況の中でもがいて状況を悪化させてしまうよりも、balan-gai・sol-so-gon での活動から撤退し、別の balan-gai で活動を行い、何年後かにまた balan-gai・sol-so-gon の状況を見にくるというものである。

ここまで、バランス理論をもとに JAPSAM は今後とるべき戦略を述べてきたわけだが、これまで挙げたすべての選択肢は、すべて JAPSAM の側から、何らかのアクションを起こすことによって現在のこう着状態を打開することをめざしたものである。現在のこう着状態において B さんと M さんの関係で、両者のうちのどちらかがもう一方に何らかの働きかけをして、何らかの変化が訪れるということはないだろう。そうである以上、まず変化すべきは JAPSAM であるのだ。というよりも、そうしないことには現在の状況が打開されることはないように思える。

おわりに

Boissevain (1974) は『友達の友達』の結びを、相互作用し、互いに依存しあう人びとは、さまざまな方法で互いに結び付けられ、これらのものが複合して、絶え間なく変化する社会関係のネットワークを形成しており、それをわれわれは社会と呼ぶとしている。社会関係、つまりは人間関係は絶え間なく変化する動的なものなのだ。つまりは今ある状況もいずれは変化していくということである。本論文で分析した、SAVE の内紛に始まる人間関係の悪化も、もともとは良好であった人間関係からそうでない人間関係へと変化したも

のだ。そして、この悪化した人間関係はまた良好な人間関係へと変化しうる可能性を秘めている。その変化を促すために、これまで B さんをはじめとするバランガイ・ソルソゴンの人びとに頼りっぱなしであった JAPSAM は自らを変えなくてはいけない。もはや JAPSAM はバランガイ・ソルソゴンを構成するいくつかの要素の1つとなっているのである。そうであるならば JAPSAM はバランガイ・ソルソゴンや SAVE といった、現地の人びとが構成する社会関係への積極的な参加をしなくてはならないのだ。そうした上で、JAPSAM、SAVE、バランガイ・ソルソゴンの人びとの関係性が、これまで以上によくなり、それがバランガイ・ソルソゴンの現状の改善へと結びつくことを筆者は切に願っている。

このような暗い内容の論文になってしまったが、筆者が JAPSAM のメンバーとしてバランガイ・ソルソゴンの人びととかかわった経験は何ものにも変えがたい大切な宝物となっている。B さんも、M さんの喧嘩してしまったし、現在バランガイの中の一部の人びとの間にはギクシャクした雰囲気があるものの、その一人ひとりの人格に焦点を当てれば、皆非常に明るく、愉快で、いい人たちばかりだ。B さんには JAPSAM の母という形容がぴったりだし、M さんと飲むお酒はいつも格別だ。R さんはいつも人生訓を熱く語ってくれる。そんなすばらしい人びとと出会えたことが筆者にとっては何よりも大切なことであるように思える。最後になってしまったが、そんなすばらしいバランガイ・ソルソゴンの人、共に活動を行ってきた JAPSAM のメンバー、いつもアドバイスをくれた T さん、M 先生、また、JAPSAM の活動を支援してくれたすべての人に感謝を述べたい。

[注]

- 1) 利害・思想・性格・趣味・出自の同一または類似を契機に発生するインフォーマル・グループ
- 2) 村長のこと
- 3) 生物反応（微生物発酵や酵素などの利用）によって生成する燃料用ガスの総称。Tさんの場合は公衆トイレの横にバイオガスのタンクを設置し、さらにその横に養豚場を作り、人間と豚の排泄物からバイオガスを得て、そのガスを住民に利用してもらうこととしている。さらに、養豚場の豚を売ったお金でバイオガスプラントの管理費、管理に必要な人件費の捻出をしている。また、公衆トイレを設置することで、現地の衛生問題、衛生教育にアプローチすることを目的としている。
- 4) 小学校前の子供が読み書きを習う施設。日本でいう幼稚園、保育園に当たる。

参考文献

Jeremy Boissevain, 1974, *Friends of Friends Networks, Manipulators and Coalitions*. Basil Blackwell and Mott LTD. (=1986, 岩上真珠・池岡義孝訳, 『友達の友達 ネットワーク、操作者、コアリッション』未来社.)

Thomas J. Fararo, 1973, *MATHEMATICAL SOCIOLOGY An Introduction to Fundamentals*. Jhon Wiley and Sons, Inc. (=1980, 西田春彦・安田三郎訳, 『数理社会学Ⅱ』紀伊国屋書店.)

参考資料

同志社フィリピンサマール会, 2002, 『サマール島の報告書』同志社フィリピンサマール会.

———, 2002, 『2002年9月 ワークキャンプ報告書』同志社フィリピンサマール会.

———, 2003, 『2003年3月 ワークキャンプ報告書』同志社フィリピンサマール会.

———, 2003, 『2003年9月 ワークキャンプ報告書』同志社フィリピンサマール会.

———, 2004, 『2004年3月 ワークキャンプ報告書』同志社フィリピンサマール会.

フィリピンサマール会, 2004, 『2004年9月 ワークキャンプ報告書』フィリピンサマール会.

学生 NGO 団体 JAPSAM, 2005, 『2005年3月 ワークキャンプ報告書』学生 NGO 団体 JAPSAM.

———, 2005, 『2005年9月 ワークキャンプ報告書』学生 NGO 団体 JAPSAM.

———, 2006, 『2006年3月 ワークキャンプ報告書』学生 NGO 団体 JAPSAM.

(40字×30字) 本文 33 ページ 400 字詰め原稿用紙 99 枚-